

夢だより 風だより

—第六想—

今年の「夏祭盆踊り花火大会」は、雨のため順延となったものの無事終了することができた。

昨年の町民体育祭を台風で中止とした「実績」のある町長としては、14日の低気圧接近の予報に、お天道様の怒りにふれるようなことを自分自身はしているのだろうか？と反省することしきりであった。しかし、翌日の午後からはまさに祭日和となり、例年にもまして多くの町民の皆さまが参加してくださいました。初めての試みである送迎シャトルバスの運行も事務局の奮闘努力の甲斐あって、おおむね良好であったと思う。

今年の8月15日は順延された夏祭の日であったが、毎年巡りくる8月15日は、敗戦から再生へと今日在る日本の出

発となった日であり、私たちが忘れてはならない日だと思ふ。昭和32年生まれの際は、その日を直接知るわけではないが、戦後という時代を共有していることに変わりはない。

「戦艦大和ノ最期」（吉田満著）には、特攻出撃で死ぬ意味について若い士官の間で激論があったことが記されている。その論戦を制したのは一士官の次のような言葉だった。「進歩のない者は決して勝たない。負けて目覚めることが最上の道だ。それ以外にどうして日本が救われるか。自分たちはその先導になるのだ。日本の新生にさきがけて散る……。まさに本望じゃないか」

高根沢町でも多くの方が戦死をされた。一人ひとり、名前と顔を持った父や夫や兄や弟である。

あれから半世紀あまり、私たちは万感の思いを抱いて散ったその思いにどうこたえていったらよいのだろうか。

戦争の記憶は年々薄れていくが、8月15日は消えてゆく過去ではない。まさにふるさとへの明日を懸命に創り上げるための原点の日なのである。

夥しい数の犠牲の上に築き上げられた自由と繁栄。そし

て、その象徴としての夏祭。祭の喧騒の中で大輪の花を咲かせては一瞬にして散る花火を見上げながら、今年の8月15日はことさら感慨深い日となった。

町長 記

